

当事者意識の復権

織田邦男

昨年十一月の政府発表によると、国の借金（長期債務残高）は九月末の時点で九百八兆八千六百十七億円だという。日本人、老若男女一人当たり約七百五十万円の借金である。GDP比で百七十三%に相当し、先進国中最悪である。

来年度予算は税収が約四十一兆円の見込みに対し予算総額は約九十二兆円である。ますます借金は増え続ける。減る見込みは全くない。にもかかわらず耳あたりの良い政策がまかり通っている。子供手当で、高速道路無料化、高校実質無償化、手当つき職業訓練制度、最低賃金引き上げ、戸別所得補償制度等々。「本当に大丈夫なのか？」大多数の国民は日本の将来に不安を抱いている。ギリシャ財政危機はユー

ロ諸国の財政支援とIMFの融資によつて財政破綻は回避されたものの、国民にはこれからの塗炭の苦しみが始まる。日本はギリシャとは違い、借金を国内から調達しているから大丈夫だといふ専門家もいる。だが本当にそうか？借金が増え続けるれば、国内からの調達にも限界があるはずだ。国民の総資産は千四百兆円あるといわれる。このペーソで行けばあと数年で借金総額が国民総資産を超えるのは間違いない。そうなれば国内からの調達はもはや無理だろう。一%上がれば利払いが九兆円増える。雪の斜面を転がり落ちる「雪だるま」のようになり加速的に借金が膨れ上がり、財政破綻となる。これを回避するには税収を奇跡的に増やすか、歳出を激減させるか、あるいはインフレを起こして国債

を紙くずにするしかない。奇跡的税収増は夢物語である。税金増は国民が塗炭の苦しみを味わうことは間違いはない。永遠に借金を続けられればこれほど楽なこととははい。だが、こんなことは子供でもわかり得ないことは子供でもわかり得ない。か国民もマスコミも危機意識が感じられない。まるで他人事だ。事態の種類は違うが、「いつか来た道」を繰り返すとならない。長期的には比較的はつきり予測できる中にある。分かっていながら「ズルズル」と状況に流され、ついには自らのコントロールさえ失つて破綻を来すという、あのおなじみの亡国パターンである。理由は何故他人事なのだろうか。一つは借金の額が膨大すぎる。

て想像を超え、我が身のこ
とと思えず思考停止に陥っ
ていることだ。

一兆円というお金は、毎
日一千万円使っても二百七
十四年もかかる。一億円札
の札束を重ねれば、一兆円
は約三万フィートの高さに
届く。F4が長距離航法で
常用している高度帯だ。九
百兆円を地上に積み上げれ
ば九千キロの高さまで及ぶ。

スペースシャトルの軌道が
高度約四百キロメートルで
あるから、その二十倍以上
の高さになる。文字通り天
文学的数字である。毎日、
百億円づつ返しても二百四
十七年の返済期間がかかる。

利子を考えれば三百年以上
だ。確かに我々のイマジネ
ーションをこえる借金の額
である。だからといって思
考停止に陥っていい訳がな
い。

もう一つは、国家に対す
る当事者意識の欠如である。

敗戦後、吉田ドクトリンに
よって、一番大切な国家の
防衛を米国に委ねてしまっ
た。防衛は米国に任せ、日
本人は金儲けに専念した結
果、持ち前の勤勉さに加え、

冷戦で漁夫の利を得たおか
げで、世界第二位の経済大
国になった。だが反面、大
切なものをつ失った。国家へ
の当事者意識、つまり国民
一人一人の「義務と責任」

から国家は成り立っている
という当たり前の意識であ
る。この後遺症は日本の至
る所に深刻な病巣として顕
れてきている。吉田ドクト
リンを六十年間後生大事に

守り続けた結果、国家は国
民を守るべき共同体である
にも係わらず、国民はその
国家を支える義務を負わな
いという当事者意識を喪失

した。国家は「ゆすりたか
りの対象」となり、「打ち出
の小槌」に成り下がった。し
日本という国は確固とし

た巖のような存在で、叩い
ても蹴飛ばしても壊れない。
いくらないがしろにしても
安泰だと思っているふしが

ある。大臣にもなるような
政治家が外国で反日デモに
参加する。国のことを貶し
たり卑下したりすること
正義だと言うような戦後平
和主義者の心情には、どん

なことがあっても国は亡く
ならないという子供のような
な甘えがある。これは現代
版「皇国無敵思想」に違
ない。ある国際政治学者に

よると国家の死亡率は二十
四%だという。過去二世紀
に他国からの攻撃や侵略で
消滅したり、併合されてし
まった国は五十一カ国とい
うのが現実である。日本人

はこの事実には決して眼を
向けようとはしない。
意国を支える気概も当事者
意識も希薄になった今、真
顔で「外国人参政権」を主
張し、「日本列島は日本人だ

けのものではない」と放言する。「六法全書をめくつてみれば最高指揮官だった」と現職の首相が語る始末である。

国家は「打ち出の小槌」ではない。世の中、「負担」のない「受益」はない。借金はいつかは必ず返さねばならないし、手品師がマントから鳩を出すようにはいかない。かつて江戸幕府が財政難に陥った際、旗本・御家人を救済するため、債権者に対し債権放棄・債務繰延べをさせたことがある。松平定信が寛政の改革の一環として発した「棄^きえん^{れい}令」である。一時的に旗本・御家人たちは喜んだ。だが以後の借金ができなくなり、結果的には社会を不安に陥れ、多くの被害をもたらした。何よりのダメージは当事者意識の喪失というモラ

ルハザードを生んだことだ。以降、旗本・御家人の無責任体質は蔓延り、幕府の権威は失墜、統治能力は衰微、幕府の崩壊へと転落する原因となった。

天文学的規模の借金漬けの日本には今後、恐ろしい混乱とモラルハザードが待ち構えている。こんな日本はあるのか。それは国家に対する当事者意識の復権だ。国家は国民一人一人から構成され、一人一人の「義務」と責任」から成り立っている。自分自身が国家そのものだと意識することしかない。醒めることしかない。国民が覚

迂遠だといって手をこまぬいてはおられない。できることから始めなければならぬ。日本の現状を憂う者同士が自発的に活動を開始し、国民に呼びかけ、当事者意識の輪を広げていく。「つばさ会」は先頭に立ち、その一翼を担うべきだろう。国家を背負っているのは我々一人一人だという当事者意識をもった日本人が一人でも多くならない限り、日本は存亡の危機に立たされることになる。今、日本人に求められているのは「国家を担っているのは我々だ」という強烈な当事者意識の復権なのだ。

福沢諭吉は述べる。「立国は公に非ず、私なり。独力の気力なき者は国を思うことと深切ならず。愚民の上に苛き政府あり」と。

愚民の上に苛き政府あり

Reference:

**Foolish people must be
sternly ruled**

[http://www.ishiryoku.co.jp/
user/takuwa/takuwa01/s
eri2_p04.htm...](http://www.ishiryoku.co.jp/user/takuwa/takuwa01/seri2_p04.htm...)

Explanation:

「愚民の上に苛き政府あり」という言葉を用いたのは、愚民を支配するには道理をもつて論ずるは困難で、ただ威をもつて畏（おど）す以外に手はなく、人民の徳義が低い場合は政府の法が苛く（過酷に）ならざるを得ない、という意味においてであった。

The explanation suggests the meaning of the phrase is that foolish people cannot be led by truth, but must be ruled harshly, though it is not necessarily the case that they always are.